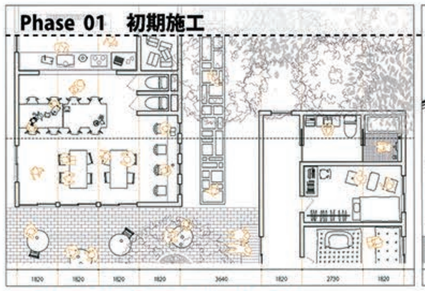
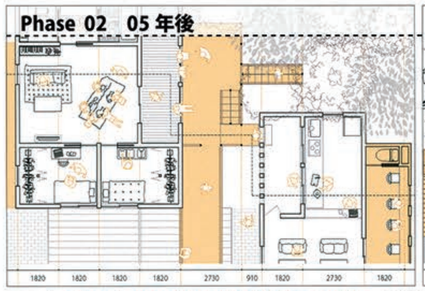
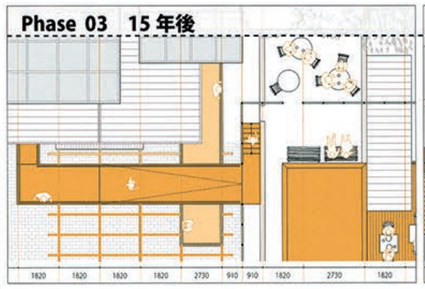
大工 in Residence 技術も賃貸する家



■一つの敷地に対し、一つの自律性の高い建物を建てると、防犯等の観点から建物同士が背を向けるように敷地に配置され、建物間に無駄な残余空間が生まれる。
■そういった状況に対し、残余空間の再解釈、転用、また、ストックの更新、増築を行うことで、単なる建築の建て替えではない、空間のボトムアップを目指す。



■その為、全体のスキームはつくらず、部分から段階的に全体を導く。主体性がなく計画的でない、アノニマスな空間が蓄積し、街に新たな風景と関係を生む。
■また、一つの街区を敷地と見立てて領域を拡張することで、物理的に建築が横断し、豊かな外部空間が生まれる。境界が消えることで人と建築が呼応し、賑わいが広がる。



■孤立していた家は緩やかに結ばれ、一つの群のように全体性を帯びる。結果、住人間に集団意識や帰属意識が生まれ、失われつつある地縁を取り戻すきっかけとなる。
■増改築は廃材を活用し、街の情景や雰囲気を新たな建築として顕在化させる。本提案は、誰もが使う空間として、建築資源の遺構として、街との関わりを持ち続ける。

日本における「愛の家」＝長屋

日本の文化であり今尚人々を惹きつける落語。その舞台の多くが長屋であったことに気付く。物知りな甚兵衛さんや、面倒見の良い徳さん、うっかりものの喜六や、しっかりものの清八。いずれも顔ぶれは多彩であるが、人と人の触れ合いを描いていることに気付く。

長屋の特徴を表す言葉として、「9尺2間の棟割長屋」が度々引用される。即ち、6畳/1家族の暮らしをしていたのだ。井戸や便所も共同で、路地も狭く、少し窮屈。長屋での生活は、どこへに行くにも、住人と顔を合わせずにはいられなかった。しかし、彼らにとっては人と会い、互いの毎日に関心を持つことが当たり前の生活なのだ。経験豊かな大人が常に若年層の相談に乗り、夫婦喧嘩には近所の仲裁が入る。醤油や米の貸し借りなどは当たり前で、親の帰りが遅ければ、小さな子供はどこかの家庭でご飯を食べさせてもらうこともある。

つまり彼らの生活の根底には助け合いの精神が不可欠であり、それが落語の題材となるような愛在る人情味を醸し出していたのである。

こうしてみると、豊かな暮らしには、ないものを共有し、それらをお互いが補う、愛の存在を感じる。即ち集まって暮らすことで生まれる愛である。

以上を踏まえ、
現代における「愛の家」について考えたい。

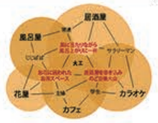
01.「コト」を共有する現代の家の在り方

足りない「モノ」を共有することで豊かな生活を営んできた「家」に対して、本提案では「家」を創りあげる「コト」を共有することで豊かさを獲得する。

02. 大工 in Residence 技術も賃貸する家

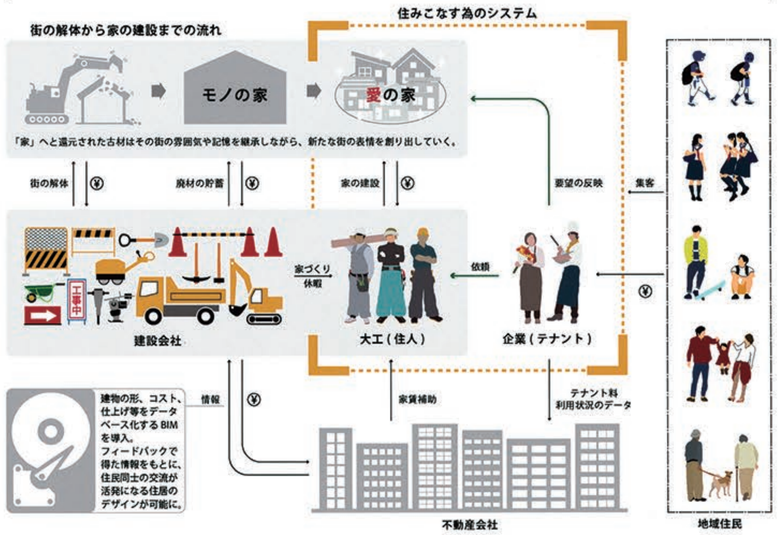
企業がテナントを賃貸する際、そこに住む大工の技術も借用する。各企業が、改修技術を保有することで、積極的な家づくりと職住一体の交流が誘発される。

03. あなたの居場所は、私の居場所



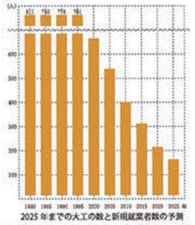
家づくりの際、複数の人間の意思が交錯することで生まれる差異を積極的に取り込むことで、各々の振る舞いを許容する、セミラティスな空間を目指す。

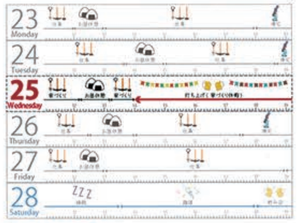
04. モノの家と住みこなす日々 ー家の魅力を高め続ける賃貸システムー



建設業 × 不動産業。即ち、「つくること」と「運用すること」を掛け合わせることで、設計の効率化や、デザインのブランディング、建物の有効活用が望まれる。その為、通常、完成した瞬間に老朽化が進む建築も、資産価値、収益の増加が見込まれ、段階的に増改築を行うことで、コストの分散にも繋がる。

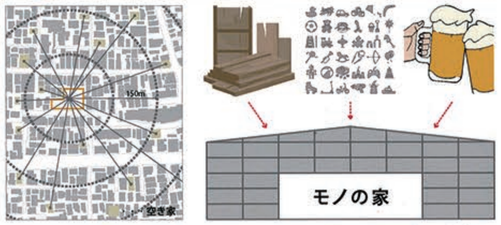
05. 大工の雇用革命と家づくり休暇





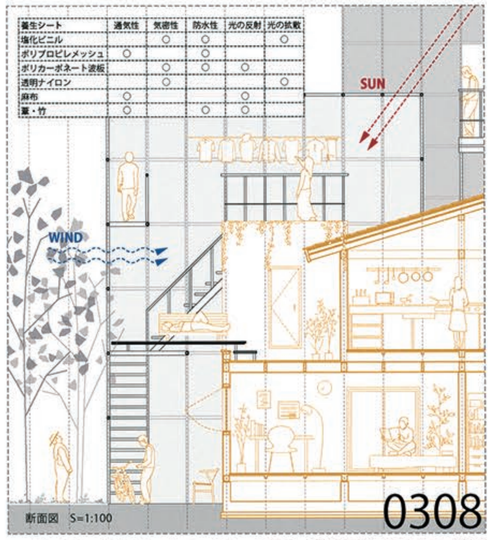
技術の賃貸は、大工の住居と年々減少する雇用を確保する。また、週に一度家づくりの日を設けることで建設活動に祝祭性を持たせ、余った時間は家づくり休暇とし、労働環境の改善に繋げる。

06. モノの家はみんなの家



街の廃材を集蓄するモノの家は、大きく伸縮堂な設え。単なる物置ではなく、大工の作業場や、街のリビングの役割も担う寛大な空間。小さな居場所の集積としての家が内包する庭のような存在。

07. 環境装置としての仮囲いが生む半屋外空間



囲いを住宅を包む皮膜と捉え、光、風、音といった様々な環境要素を管理することで、快適な半屋外空間を作る。即ち、つくることと、住まうことの、両方に適した環境を同時に形成する。

0308